

演題 認知症の方が安心して豊かな時間が過ごせるための支援を考える
～人間性の尊重とコミュニケーションの方法～

所属 特別養護老人ホームやまゆり苑

発表者 介護職員 浜村 初美

【はじめに】

認知症にはいくつかの種類があり、アルツハイマー型認知症は、脳にアミロイドというたんぱく質がたまり、正常な神経細胞が壊れ、脳萎縮が起こることが原因だといわれている。記憶障害に始まり、徐々に身体機能が衰えていく、進行性の病気であるが、豊かな感情は残っており、治療と支援により穏やかな人生を送ることもできる。今回「アルツハイマー型認知症中期」と診断されたYさんの、日時や場所・人物を認識する能力の障害や、現在自分がおかれている状況を理解できない状態(以下、見当識障害という)などからくる、強い不安を軽減するための、支援から学んだことを報告する。

【事例紹介】

Yさん 女性 88歳 要介護3 幼い時から肉親を次々に亡くされ、65歳の時から独居の生活が始まる。平成23年8月頃幻聴、幻覚があり、除々に物忘れや、身の回りのこともできにくくなり、一人暮らしでの生活が困難となったため、平成24年5月やまゆり苑入所となる。入所された当初の認知症状は、車椅子のブレーキのかけ忘れ、日常会話には支障がないが、記憶を必要とする会話は、つじつまを合わせることができる程度であった。平成28年5月この頃には、「わからんやになっていけんわ」と口にされることも多くなり、「お父さんがなかなか帰って来ない」など不安な感情の中をさまよい、不安な表情をされていることが多くみられるようになった。

【実践内容】

①起床後毎朝、廊下のカーテンを開けてもらうことをお願いした。手伝ってもらったことに対して、感謝の気持ちをきちんと伝えていった。誰かの役に立てていることを、実感してもらえるよう心掛けた。

②毎日決まった時間に足湯を行った。Yさんのリラックスした時間での関わりを持つようにした。

③Yさんの生活パターンを把握し、居室におられる時間は、職員の方から意識的に訪室し声を掛けた。他の、関わりの時間も、穏やかな気持ちが少しでも長く続くような会話と、良い感情が残るように接した。また、顔を見ると「Yさん」とこまめに、声を掛けるようにした。

④不安感が強い時は、「手を握る」「背中をさする」「身体に手を添える」など Yさんに触れ、表情、反応を見ながら話を聞くことで、Yさんの不安な感情が減り、安心できる時間が増えて行くようにした。

⑤困った表情で、「あんたちよっと、葬式にいかないけんけど私の大事な人で・・・」と、職員を呼び止められた時の対応は、Yさんが歩んで来られた時代に入り込んで話しをし、気分が落ち着くよう接した。

【成果とまとめ】

Yさんとの関わりを見直して、支援を行ったことで、Yさんの不安な言動は減った。Yさんの安心感につながったケアで重要な要素は、コミュニケーションである。Yさんは、認知症の進行にともない、今後も無くなることのない不安を抱かれると予想される。このことは、多くの認知症の方の課題でもある。その方が安心して、豊かな時間が過ごせるよう、今回学んだ以下のことを生かして支援していきたい。①その方のかけがえのない人生史を知り、感じる心が生き続けていることを、念頭に置いて支援する。②その方の不安の内容や感情を受け止め、安心感につなげるために、言葉や態度などの交流の技術を高める。③不安などの混乱を予防するために、本人が穏やかな時間に関わることを重視する。